（様式７：電子媒体）
（若手研究者海外挑戦プログラム）

令和 3 年 5 月 13 日

# 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長　殿

受付番号 202080206
氏　　名 齋藤 崇治
（氏名は必ず自署すること）

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 バークレー　（国名アメリカ合衆国　）

研究課題名（和文）　：なぜアメリカ大統領は官僚を統制できないのか　連邦公務員労組に注目して

2. 派遣期間：令和　3年　1月7　日　～　令和　3年　4月　17日　（　101日間）

3. 受入機関名・部局名：カリフォルニア大学バークレー校日本研究所

4. 派遣先で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本研究では、アメリカ大統領と官僚との関係について、省庁間調整を中心に分析をしている。第一に、アメリカの省庁間調整のデータセットを計量テクスト分析の手法を用いて構築した。それにより、1994年から2016年までに計2000超の省庁間調整を特定した。この作業によって、省庁間調整が近年増加していることが明らかになった。その上で、調整を義務的調整、裁量的調整とに分類した。そして計量分析を行い、大統領がどのように影響力を行使しているかを明らかにすることを目指している。

第二に、以上の計量分析に加え、事例研究を用いた定性的な研究も進めた。特に、なぜ近年省庁間調整が増えたのかを分析した。現在、9.11テロ－イラク戦争期にその要因があると考えている。テロ対策を名目とした国土安全保障省を中心とした政策形成によって、政策的に対立する保健福祉省などをコントロールしようとしたという仮説を検証するために、現在議会資料や大統領資料などを用いて定性的な手法を用いた分析を進めた他、新たにフォーマルモデルを用いた分析を行なった。この研究は継続して展開する予定である。

また、政官関係を比較の視座から考察するために、Gailmard教授の指導のもと、フォーマルモデルを用いて、政官関係の変容と大企業との関係を理論化する作業を進めている。これによれば、積極的にロビイング活動を行う企業は、より政治主導的な政官関係に変えるインセンティブを有することが明らかになると考えている。この研究も継続する予定である。

5 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

今回の研究成果は、今年度選挙学会、アメリカ学会とで発表する。また、来年には国際学会で発表することも計画している。それらのコメントを踏まえ、国際査読誌に投稿する論文を執筆する予定である。今年、来年中にはアクセプトされるように、投稿、改訂の作業を繰り返していきたい。

また、今後は、これまで行ってきた計量分析と事例研究を統合し、博士論文の執筆を目指す。その中で、まだ分析途中である9.11-イラク戦争期における省庁間調整のあり方についての事例研究フォーマルモデルを用いた省庁間調整拡大の理論構築や、クリントン政権期における省庁間調整のあり方についての事例研究を進めていきたい。また、必要に応じて計量分析も深めていきたい。

博士論文提出以降は、調整と政官関係との関係の分析をアメリカ以外の他の先進諸国へと広げていきたい。そして、将来的には日本や他の欧米先進諸国を分析対象とすることで、各国における政治主導の国際比較を通じた国際理解・協調に貢献していきたい。具体的には、各国の政治制度のあり方によって、行われる調整のあり方や程度も大きく異なるはずである。そうした比較と政治主導の枠組み、程度との関係を議論していきたい。博士論文も含めて、先進国における調整を論じた研究を英語で書籍として出すことを目指したい。

また、上述のフォーマルモデルを用いた政官関係の分析は今後、論文として発表できるように研究を進めていく予定である。2021年度はその分析を進め、2022年度には学会発表ができるようにしたい。

6 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

アメリカ研究者として、アメリカでの在外研究は必須であると考えていた。特に、在外研究開始当時は、連邦議会において暴動が発生し、無事政権移行が進むのか不安に包まれた中であった。このようなタイミングでアメリカで在外研究できたことは、自らのアメリカ大統領制、官僚制の研究を顧みる良い契機となった。物価や航空運賃も高いことから、在外研究は本プログラムなしには考えられなかった。本プログラムに感謝申し上げたい。

また、在外研究期間中、研究発表のワークショップに毎週参加することができた。このワークショップは、アメリカのトップ研究者や院生が発表していくもので、発表される研究はもちろん、質問に大きく学んだ。これから、国内・国際を問わず学会において役立てていきたい。

また、研究を進めながら、複数のゼミに参加させてもらった。その中で、日本では学部内の授業ではなかったフォーマルモデルを基礎から学んだ他、アメリカ政治・比較政治の優れた論文を横断するゼミにも参加した。後者では、自らの研究に対して俯瞰的な視点を得ることができた。これから執筆する博士論文、そしてその後の研究に役立てていきたい。